

日本文學刊行史（慶長元和時代まで）

吉 澤 義 則

日本文學の刊行されたのは慶長八年の富春堂版太平記四十冊を初とするのではあるまいか。刊行年月の不明なものもあり、今日傳存してゐないものもあるかも知れないから、確なことは言はれないけれども、一般の刊行状態から見ると、慶長前に日本文學書が刊行されたとは考へられないのである。或は日本文學書が文學書として刊行されたことではないといふのが正しいかも知れない。

尤も元亨元年^{西曆一三二一}の和語燈錄、康永元年^{西曆一三四二}の夢中間答、應永廿六年^{西曆一四一九}の向阿上人三部假名鈔、文明五年^{西曆一四七三}の正信偈三帖和讃のやうな假名法語類を文學書に數へたり、明德元年^{西曆一三九〇}の融通念佛緣起を文學書としたならば、鎌倉末期までも溯りえよう。如上の法語類はともかくも、融通念佛緣起などは文學書として然るべきものであらうが、こゝでは、その刊行事情までも參酌して、しばらく日本文學書の刊行と見たくないとおもふ。

かう局限して出版史上を見渡すと、日本文學刊行史は慶長から始まるものとしなければなるまい。それは餘りに獨斷的な態度かも知らぬ。が、少くとも、これを歴史として刊行史として、系統的の展開を見ようとしてゐる今の目的を以てしては、かうした方針、即ち文學として取扱つてゐなかつた偶然の存在は除外して進まうとすることが、

寧ろ妥當であるやうに信ぜられるのである。ところで寛永になると出版界は頓に興隆して、その以後は硬軟の文學書類頻出して、到底短時日に調査されるものもなく、俄に概説されるまでに要約されるものでもないから、これはすべて後日を約して、今は刊行史を慶長元和までに打切つて、そこに至る圖書雕葉發達の事情を略敘するに止めようとおもふ。

我が國に現存してゐる最古の印刷物は、稱徳天皇神護景雲四年即ち寶龜元年西曆七〇七に版になつた四種の陀羅尼である。日本國現報善惡靈異記によると、天平勝寶二年に大伴赤麻呂の懺悔文を版にしたやうに見えてゐる。天平勝寶二年は孝謙天皇の御代での四種陀羅尼の出版せられた寶龜元年よりも廿年前に當る。尤も孝謙天皇がこの摺寫を御發願になつたのは、押勝の亂の平定した天平寶字八年西曆七六七で、東大寺要錄には此の年摺寫の陀羅尼を十大寺に納められたやうに書いてある。

赤麻呂の懺悔文印刷を事實とすれば、我が國に於ける圖書刊行史の起源を西曆七百五十年まで溯らしめることが出来るのみならず、そこにも摺寫の事が珍らしさうにも書いて無いのであるから、この事は更に古くから行はれてゐたものと考へられないでもないとおもふ。が、懺悔文印刷に就いては本文の解釋に異説があることではあるし、固よりその品が残つてゐるでもないことであるから、懺悔文の問題は後の研究に残さうとおもふ。

ところでこの摺寫の法は摺衣の法から思ひついたものとして、黒川眞頼博士は説いてゐられるが、これは摺寫の法を以て日本人の創意に出たものと見た上の説である。島田翰の六朝刊行書説や、一般に説かれてゐる隋代雕板説

は認められないとしても、敦煌石室書錄の文もある上に、現に敦煌石室から、唐代と考へられる朱印摺佛や唐末通咸九年西曆八六九年に版行された金剛般若波羅蜜經が出て、唐代に雕板の行はれたことを證明してゐる。特に金剛般若波羅蜜經は扉に複雑な釋迦說法の圖まである精刻の經卷で、雕板術の大に進歩した後のものである。即ち支那に於ける雕板術はその餘程以前から發達してゐたことを思はしめるに十分な材料である。支那にこの事があつたとすれば、當時の事情から推して、摺寫の法も支那に學んだものと考へるのが穩當なやうに思ふ。

敦煌石室から出た摺佛版經はいづれも木彫と考へられるが、前記四種陀羅尼は金屬版であらうといふ説が近來力を得つゝある。それも印文の上に磨滅の跡が見えないといふ簡單な事實が主な理由に擧げられてゐるに過ぎない。碑文を金石に彫刻することは支那では太古からあることではあるし、我が國に於ても推古朝には幾多の實物が現存してゐるのみならず、和歌山縣の隅田八幡宮に傳はつてゐる和鏡——それは大體雄略天皇の御代を降らぬものと考へられてゐる——ものなることでもあるから、當時彫金術の傳はつてゐたことは明かであるが、それらはいづれも陰刻である。但し支那には印材に黄金青銅などを用ひ、それに陽刻することは古くから行はれてゐたから、その法が陀羅尼印刷に應用されたといふ事が考へられないではないが、この版材を金屬と決定してしまふには資料が足りないとおもふ。我が國に於て金屬が版材に使はれたのは、遙か下つて慶長年中に朝鮮出版法の影響を受けて活字版の行はれた際に、銅活字が用ひられたまで、一度もその事のなかつたらしいといふ事實は、必ずこゝに參考しなければならぬと考へる。

その後王朝時代中期摺供養の隆になるまでは、開版事業は中絶されてゐたかの觀がある。傳教大師の筆蹟を摸刻したと稱する法華經即所謂山家本或は傳教板といはれてゐるものや、義真點の唯議論・大智度論が延曆寺で開版されたことが傳へられてをり、また有りさうな事でもあるが、それを證明すべき何物もない。文獻に見えてゐるものには御堂關白記寛弘六年^{西曆一〇九一}十二月十四日の條の法華經千部、小右記長和三年^{西曆一〇四一}十月十七日の條の法華經千部などを初として、水左記・兵範記・本朝續文粹・拾遺往生傳・僧西念供養目錄・廣隆寺由來記等に法華經・無量壽經・觀音賢經・般若心經・金剛壽命經・陀羅尼經・仁王般若波羅蜜經・阿彌陀經・藥師本願經・無量義經等が見えてゐる。この時代に於ける現存最古の版經には、天喜元年^{西曆一〇五三}八月九日の朱書ある佛說六字神咒王經、承曆四年^{西曆一〇八〇}六月三十日の墨書ある法華經第二、寛治二年^{西曆一〇八八}の刊記ある成唯識論などがある。

摺供養の興隆は、部數が多いので手寫では間にあはなかつたといふ理由もあらうけれども、また當時將來された支那の刊經を見て、それに學んだといふことも考へてよからうと思ふ。寛平六年^{西曆九四八}以後公使の往來は絶えてゐたが、支那商船や入宋僧によつて、刊行された内外典が常に輸入されてゐたのであるから、その影響が無かつたといはれまい。一つは珍らしいといふ事も手傳つて、摺經供養が寫經供養と相並んで行はれたものであらう。

かうして摺經興隆には、支那版經將來の影響が考へられないではないが、開版上の様式技術といふやうなものには、まだ宋代の影響は認められぬやうである。宇多天皇寛平六年遣唐使の事が中絶して後は、我が國の文化は海外の影響なく、獨特の姿に展開したのであつた。固より我が國固有の文化様式が、外國文化特に支那唐代の文化によつて改裝着色されたのが、王朝時代の文化ではあつたが、清和天皇頃から覺醒した國粹の眼に監督せられつゝ、そ

れが純日本的に發達した時代であつて、印刷術もともかく特有の發達を遂げてをり、宋版の版式を學ぶ必要のない程度までになつてゐたと考へなければならぬ。かう考へて來るとその傳本こそは無いけれども、摺經の事業は連續的に行はれてゐて、法華經や唯識論のやうな相當大きな部數のものでも、開版する事は容易に出来るやうになつてゐたものと信じなければなるまい。つまり寶龜元年の四種陀羅尼以後三百年ばかりも、出版事業が中絶したやうに見えるのは、たま／＼傳本が無いからであつて、實はこの事業は繼續せられてゐたと認めて然るべきものゝやうに思はれる。この版式によつて印刷されたものに京版と奈良版とがあつた筈である。前記寛仁版の成唯識論の奈良版であることはその刊記によつて明かであるが、確に京版と認められるものは傳存してゐない。

宋代印刷術の我が雕版界に用ひられるやうになつたのは、鎌倉時代からである。寛元四年^{西曆一〇四六}版の佛制比丘六物圖、寶治二年^{西曆一一四一}版の梵網盧舍那佛説心地法門品菩薩戒本などは、宋版式によつたものの中の古い種類に屬する圖書である。この宋版式の輸入につれて圖書裝幀上に變化が起つた。その以前の我が國書冊の裝幀には卷子・粘葉(胡蝶裝)・大和綴・旋風葉・袋綴の五種類あつたのであるが、現存資料から考へると、版本は卷子と粘葉との二種に限られてゐたやうである。折本は卷子本の一轉した裝幀として、古くから有りさうに思はれるのに、我が國では、刊本寫本共に、それと確に認められる傳本は一つも見當らなかつた。袋綴は王朝時代の中期にも見られ、鎌倉時代のも傳はつてゐるのであるが、何れも寫本であり、また表だゝない私用品に限られた假綴程度のものばかりである。然るに宋版印刷術が輸入されてからは、版本に折本と袋綴とが生れた。これは明かに宋の版本に學んだものである

が、室町時代からは袋綴の急展開を見るに至り、江戸時代に至つては殆どこの裝潢に限られるといふ有様であつた。宋元版出版術の輸入と共に起つた我が出版界の變化には、更に大なるものがあつた。それは出版圖書の種類を増加であつた。宋元版印刷術輸入前に於ては、彫刊は佛敎の經典に限られてゐた。

支那に於ては唐宋既に字書・小學刊行の事實があり、北宋時代に刊行された醫書・經史・詩文集の類が入宋僧や支那商船によつて輸入されてゐたにもかゝらず、佛典以外の刊行が企てられた形跡は全くなかつた。これはその時代がまだこれらの諸書版行を要求することが無かつたによるであらうことは勿論であるが、印刷術乃至はその様式が——或はその様式を學ぼうとする心的傾向が——この點に就ても、或程度まで交渉を持つべきものであらうと考へる。ともかくもこの新印刷法が行はれた鎌倉時代以後に於て、佛典以外の種々なる書籍の刊行を見るに至つたのである。

これら諸種の書籍刊行の事實が、宋學や禪宗の渡來に密接な關係のあることはいふまでもない。

鎌倉室町時代になると、日本人の撰述にかゝるものが數々刊行された。禪僧の語録類は數が多いから省略するとして、先づ僧源信の往生要集承安四年、西曆一四九〇年、西曆一四九七刊等、僧源空の選擇本願念佛集建隆元年、西曆一〇二二刊等、僧空海の三教指歸正應二年、西曆一三二二刊、正應三年、西曆一三二三年、西曆一四九七刊、僧安然の童子教訓等を初として、假名法語類に源空の黒谷上人和語燈錄元亨元年、西曆一三二二刊、正應二年、西曆一三二三年、西曆一四九七刊、僧顯如の蓮如上人御文明應七年、西曆一四九八刊等があり、著者未詳融正應三年、西曆一三二三年、西曆一四九七刊、僧傳空海の實語教明應六年、西曆一四九七刊、僧親鸞の正信偈和讃文明五年、西曆一四七三刊、僧顯如の蓮如上人御文明應七年、西曆一四九八刊等があり、著者未詳融正應三年、西曆一三二三年、西曆一四九七刊、僧淺然の三國佛法傳通緣起應永六年、西曆一四九九年、西曆一四九七刊、僧周印の佛祖宗派綱要應永廿五年、西曆一四八八刊、僧虎關の元亨釋書貞治三年、西曆一三二三年、西曆一四九七刊等。

年西曆一三六四 同聚分韻略（德治二年西曆一三〇七刊等） 著者未詳法華經音訓（至德三年西曆一三八六刊等） 同塵添城囊鈔（天文元年西曆一五三二刊） 同節用集（天正十八年西曆一三七七刊等） 所謂鏡頭屋
 本節用集（應永二年西曆一五九〇刊） 僧珠光の淨土三部經音義（天正十八年西曆一五九〇刊） 著者未詳聲明法則（天文十年西曆一五八二刊） 同諸講伽陀（文應二年西曆一五九三刊） 聖德太子の憲法十
 七條（弘安八年西曆一八二七刊） 僧空海の遍照發揮性靈集（正嘉二年西曆一五九〇刊） 同御請來目錄（德治三年西曆一三三三刊） その他大原談義圖書（永正十七年西曆一五二〇刊） 八十一難經圖
（天文五年西曆一五三六刊） 貞永式目（大永四年西曆一五二四刊） 御成敗式目（享祿二年西曆一五二九刊） 庭訓往來（天正八年西曆一五八〇刊） 和漢朗詠集（明應九年西曆一五三〇刊） 假名曆（元弘元年西曆一三三一刊） 刊年
 未詳倭名類聚鈔等に至るまで、諸種の圖書が京都・奈良・高野山その他の諸地方で版行されたのであつた。

この時代に於て佛教經典の出版されたことは固よりであり、支那の禪に關する諸書も盛に刊行された。が、こ
 れらは數が多くて、一々登載するには餘りに煩瑣であるから、それらの宗教書類以外即ち外典俗書の翻刻された主
 なるものだけを拾つて見ようとおもふ。刊行時代に於て最も古いのは、寶治元年（西曆一四七七刊）と傳へられてゐる
 論語集註である。後深草天皇の御代であり、北條時頼執權の時代であるが、集註本が版行されるには早すぎるやう
 におもはれるし、傳本も無いやうであるから、急に信することは出来ない。傳存してゐる論語刊本中の最古のもの
 は正平十九年（西曆一四四一刊）に於て鑲梓された五冊である。この板はその後まで傳はつてゐて、少くとも二度刷摺されてゐ
 る。この版本はまた明應八年（西曆一四九一刊）周防で覆刻版行されてゐる。論語集解はまた天文二年（西曆一五三三刊）堺で出版された。大學
 章句の版になつたのは文明十三年（西曆一四八一刊）で、鹿兒島に於てである。この版は間もなく漫滅したので、延徳四年即ち明
 應元年（西曆一四九二刊）に再刻された。室町時代に音註孟子が出版されたがその年次も場所も明かでない。論語や大學が、京都
 で版にならずに邊陲の地で版になつてゐるのは、一見不審のやうにも思はれようが、それらの地が皆當時に於ける

新文化の輸入地であつたことをおもへば、凡て明瞭になることと思ふ。四書の中、中庸は慶長年中に活字版で印刷されたまでは、刊行されなかつたやうである。

以下刊行年次によつて數へて見ると、古文尙書孔子傳元亨二年西曆一三三二年西曆春秋經傳集解正統二年西曆一三三二年西曆詩人玉屑正中元年西曆一三三二年西曆塞山詩正統二年西曆一三三二年西曆白氏文集應安六年西曆一三三七年西曆李善注文選應安四年一三七四年西曆杜工部詩永和六年西曆一三七六年西曆歷代帝王編年互見之圖永和二年西曆一三七六年西曆新編排韻增廣事類氏族大全明徳四年西曆一三九三年西曆古今韻會舉要應永五年西曆一三九八年西曆增修五話禮部韻略應永六年西曆一三九九年西曆韻府郡玉永享二年西曆一四三〇年西曆錦繡段應永二年西曆一三九三年西曆三體詩明應四年西曆一四九五年西曆古文眞寶後集永正三年西曆一四五〇年西曆醫書大全大永八年西曆一五二八年西曆韻鏡享祿元年西曆一五二八年西曆四體千字文天文十五年西曆一五五五年西曆辨證配劑醫燈天正十二年西曆一五八四年西曆其の他刊行未詳の書に胡會詩・古文眞寶・杜工部集・冷齋夜話・歷代帝王紹運圖・十九史略・唐子傳・爾雅・注千字文・釋文千字文註・五經・毛詩・毛詩鄭箋・莊子口義・列子虛齋口義・蒙求等が擧げられる。

これらの刊行書類は時代の要求に應じたものであり、時代を反映するものであつた。當時は我が國第二次の支那文化輸入期であつた。古く奈良朝を中心としてその後輸入された第一次の支那文化は、王朝時代寛平後に於て完全に日本文化の中に消化しつくされてしまつてゐた。

元來初から消化の出来る營養素だけを選んで攝取してゐたのだから、攝取と消化とは殆ど同時に行はれたと見てよいとおもふ。が、新しい刺戟が次から次へ現はれて來た當時に於ては、自らその影響から脱れることは困難であつたとおもふが、遣唐使の往來も無くなり——宇多天皇寛平六年中絶してしまつた——支那文化と絶縁してその獨

立を全うした王朝時代の文化は、完全な國民性に根ざした日本文化の純なるものであつた。それが中世になると、支那宋代の文化の影響を受けるやうになつた。即ち支那文化の第二次輸入である。この時我が精神生活に動搖を與へたものは宋學と禪學であつた。宋學は誰の手によつて傳へられたかは明かでない。榮西によつて傳へられた禪は、先づ鎌倉に根を張つた。而して第一に迎へられて歸化した宋僧は蘭溪道隆であつた。實に寛元四年西曆一四一六であつた。次いで來朝したのが兀庵普寧であつて、その語録兀庵錄はその弟子景用によつて出版されたが、刊年は明かでない。かうして禪宗の興隆につれて禪藉が新版式によつて續々刊行されていつたに不思議はない。支那の詩文集や韻書類が多く刊行されたのは、宋學にも禪學にも縁が遠さうに見えるが、禪僧が己が心地を表現するのに詩形を用ひるのが常であつたから、その實用練習に必要であつたのと、一つにはその必要なる練習から養はれた趣味の要求があつたとの理由から、それら盛行の事實をも容易に説明がつかうとおもふ。前掲諸書の中になほ幾種かの漢藉が見えてゐるが、それらは宋學關係のものか然らざればそれに導かれたものと見てよからう、日本の撰述書の中には一般實用向の諸書も見えてゐる。これらは、この時代になつて、一般實用品の要求に應じられるまでに印刷術が發達簡便になつたことを示すと同時に、文化の進歩、教育の普及につれて需要が増加した爲、暫行の收支が償はれるやうになつたことを示すものと考へてよからう。

かう見渡して歌書の一つも見えてゐないのが怪まれよう。前掲書目によつても明かな通り、我が撰述書の佛敎關係以外のものが刊行されたのは、室町時代になつてからであるが、この室町時代は國家的に自信を失つた時代であ

る。大義名分を辨へた足利義持の如きもないでは無かつたが、養滿の非望といひ、義政の哀願といひ、當時の爲政者の支那に臨んだ態度がその事實を裏書してゐる。けれども、この時代精神は、王朝時代風暗黒時代に於けるが如く、文學の上には及ばなかつた。尤も博士家が中庸を説くに新註を用ひたといふやうな事はあつたが、文學の傳統は、この時代には、一時的な氣まぐれな時代精神などに動かされるには、餘りに強い力となつてゐた。さういふわけで、この事大的時代精神が圖書刊行の上に支配した爲に、歌書の雕槧が行はれなかつたとは考へられない。否寧ろ歌書は餘りに貴重され秘藏されたから、刊行されなかつたのだと信ずる。

古今和歌集は和歌の規範として大切に傳授せられたものであるが、その切紙傳授の儀式が創められたのは、東常縁からであり、それが宗祇に至つて一層儀式的になつたと考へられる。その他の勅撰和歌集に對しては、それほど敬意は拂はれなかつたのではあるが、ともかくも和歌といへば非常に神聖視されてゐたのであつた。従つて和歌の學問は重大視されてゐたから、その範圍内のもの、即ち伊勢物語・源氏物語なども、後にはやはり傳授様式によつて繼承されるやうになつたほどの重大さを持つてゐた。勿論要求は多かつたであらうけれども、この秘佛を濫に公開するに忍びなかつたものとおもふ。かくてこの時代には所謂國文學書は一部も刊行されてゐないのである。

で、前掲和漢朗詠集の如きもその刊行されたのは、當時詩集流行の時潮に載せられた詩句の爲であつて、和歌の爲では無かつたであらうと考へる。なほ行阿假名遣が天文廿一年^{西曆一五五二}に出版されたと見る人がある。この天文廿一年は書寫識語の年次であつて、刊行年次ではないとおもふ。行阿假名遣は定家の認定を経たものと信じられ、歌學とは極めて密接な關係にあるものであるから、まだこの時代に公刊される筈のものではなく、必ず慶長以後のもので

あらうと信ずるのである。

豊公文録の役は政治的には國帑を疲弊せしめたゞけで明かに失敗であつたが、國民精神の上に與へた刺戟、活字印刷術を傳へて出版界に與へた刺戟、陶工を來朝せしめて陶器界に與へた刺戟等その損失を償つて餘ある利益を齎した。

古傳統による印刷事業は室町時代になると奈良も高野も衰微してゐた。京都は淨土教に關する出版物によつて、やゝ活氣を呈した觀はあつたが、一體に新來の宋元印刷術に壓倒されてゐたのは事實である。我が印刷界は宋元文化と共にその印刷術が輸入されて、印刷界に新生氣を注入した爲、印刷界は頓に隆盛になり、印刷書の種類も印刷地の範圍も大に擴大されたのであつたが、その中心地たる京都も應仁の亂後は兵亂がつゞいた爲、自ら印刷界も衰運に向はざるを得なかつたのである。恰もこの時元祿の役は朝鮮活字の法を傳へた。朝鮮では固より整版も行はれてゐたが、高麗朝以來妙に活字印刷が發達してゐた。この活字印刷の事も支那から傳來したものには相違ないが、當時は却て支那よりも朝鮮に於て流行してゐたのである。この法に着眼して先づ試みさせられたのが後陽成天皇であらせられて、文祿二年西曆一五九三に古文孝經を慶長二年西曆一五九二に勸學文・錦繡段を同四年西曆一五九四に日本書紀神代卷古文孝經・大學・中庸・論語・孟子・職原鈔を、同八年西曆一六〇三五妃曲を、その他長恨歌琵琶行を印行あらせられた。なほ民間でも新刊餘款蒙求が文祿五年西曆一五九六に出版されたのを初として、慶長年中には數百種の内外典が梓行されてゐる。活字印刷は國人に珍らしかつたせいか、非常に興味を引いたらしく、また丁度時勢も一轉したといふ事もあつたであらうが、

活字印刷が楔機になつて一般に印書界が非常な活氣を呈するに至つた。活字印刷を刺戟として勃興した印書界は従前と違つた所謂外典の書が主になつてゐるのは、文化史上確に注意すべき現象である。

特にこゝに注意したいのは國文學書類が刊行されるやうになつたことである。伊勢物語闕疑抄に慶長二年西暦一五九七の中院素然の識語はあるが、刊記でないから、その年を刊年と見ることは出来ない。無言抄にも慶長三年西暦一五九八の空性法親王の識語はあるが、これも刊記でない。徒然草壽命院抄に慶長六年西暦一六〇一の中院素然の識語があるが、同じく刊記ではない。が、この壽命院抄は慶長九年西暦一六〇四に活字を以て刊行された。これに先だつこと一年、即ち慶長八年西暦一六〇三に太平記が富春堂によつて開版されてゐる。この太平記は片假名交りであるが、同じ片假名交りのがまた慶長十五年にも出版された。なほその前年に版になつた太平記には平假名が用ひてある。もとより活字版であるが、この版におもしろいのは、文中の漢字に平假名の振假名が加へてあることである。尤もルビの加へてある漢字活字を用ひたのでなく、別にルビの活字版を作つて漢字傍に添へたものである。活字版にルビを用ひるのは我が國の創意である。漢文の活字版にルビや反點を用ひるのはやゝ後れてゐるやうで、元和寛永に至つて叡山版や野山版に見えてゐる。但しこれはたゞ私の管見によつて述べてゐるのであつて、もつと早く始まつてゐるのかも知れないし、また相互の關係についてもまだ調べてゐない。

話はやゝ餘談にそれだが、慶長十三年西暦一六〇八伊勢物語が出版されたことは國文學上大に注意すべき事實である。慶

長十三年の刊行と斷言することを憚る人もあるやうであるが、前記圖疑抄や無名抄の場合と違つて、それが刊記の年次であるから、先づこれに據つて大過なからうとおもふ。刊記は中院通勝である。

この伊勢物語は所謂光悅本・角倉本或は嵯峨本と呼ばれてゐる當時の豪華版の一種である。この書は六回までも重版されたのであつて、その如何に時好に投じたかを窺ふことが出来よう。輸入本である。なほ本文は本書と同じくして慶長十五年の刊記のあるものがある。その刊記には署名が無いが、角倉素菴の文だと傳へられてゐる。但し今傳本のあるのを聞かない。

普通嵯峨本と呼ばれてゐるものに觀世流謄本數種・久世舞二種・方丈記・扇の草紙・百人一首二種・歌仙四種・伊勢物語數種・伊勢物語背聞抄二種・源氏小鏡・淨瑠璃物語・本朝古今銘畫・二十四孝・徒然草五種・源氏物語二種・平家物語二種・保元物語二種・平治物語二種歟・撰集抄・古今和歌集・能花傳書・無言抄・清少納言・犬たんか・文章達德錄・史記がある。かうして見ると嵯峨本には國文學書が目立つて多い。従つて嵯峨本は日本文學刊行史とは密接なる交渉のあるものと思ふから、嵯峨本に就いて一言を費すことが必要であらうと信ずる。

嵯峨本の研究に於ては和田維四郎氏の嵯峨本考が最も委しい。和田氏は所謂嵯峨本を

- 一 光悅又は素菴の眞筆版下なること
- 二 版下文字の大小行數等略同一なること
- 三 紙質及印刷の一致すること
- 四 光悅の意匠に成れる表裝なること

の四條件に適合するものと定義し、更に嵯峨本を光悦本と角倉本即ち狹義の嵯峨本との二種に分けて、所謂嵯峨本をそれぞれに分屬せしめてゐる。

一、光悦本

觀世流謡本 百冊 (活字版)

久世舞 一冊第一種第二種 (同上)

方丈記 一冊 (同上)

百人一首第一種 一冊 (同上)

右四種贈與本

扇の草紙繪入本 一冊 (整版)

右好事本

以上光悦眞筆稿本に基けるもの

本朝古今銘畫 (活字版)

右は光悦自筆にあらず且光悦本とは稱すべからざれど、光悦に深き關係あるを以て假に茲に加ふ

一、嵯峨本(角倉本)

伊勢物語繪入本 二冊 活字本

伊勢物語宵聞抄 三冊 (同上)

右二種素庵自筆稿本に依るもの

徒然草 二冊 (活字版)

百人一首曾像入本
第二種 一冊 (整版)

歌仙曾像入本
第三種 一冊 (同上)

以上繪入又は製本に意匠を凝したるもの

源氏物語 五十四冊 (活字版)

古今和歌集 三冊 (整版)

撰集抄 一冊 (活字版)

以上用紙と印刷の良好なるを主とし何等美術的意匠を加へざるもの

一、擬似本

平家物語第一種 (活字版)

保元物語第二種 (同上)

平治物語 (同上)

能花傳書 (同上)

二、非嵯峨本

平家物語第一種 (活字版)

徒然草第四種

(活字版)

歌仙第一第二種

(整版)

淨瑠璃姫物語

(活字版)

二十四孝

(整版)

保元物語第二種

(活字版)

一、未見本

清少納言

無言抄

犬たんか

以上の通りであるが、和田氏が見られなかつたものに歌仙第四種・源氏小鏡・徒然草第五種がある。歌仙第四種は立派な具引色紙の卷子本で、猪熊信男氏の所藏であり、立派な光悦本である。源氏小鏡は久原文庫所藏であつて活字も版の寸法も伊勢物語背聞抄と全く同一であるから、角倉本に入るべきものである。但し久原文庫の源氏小鏡は並紙摺であり、表紙も後に改めたものである。が、これは並本で別に背聞抄と同様な紙を用ひたものが在つたであらうと思ふ。徒然草第五種は頼原退藏氏の藏本で、擬似本の部に入れらるべきものであらう。尤もこの和田氏の種類には異説もあらうと思ふが、便宜上和田説に従ふことにする。

右に擧げたやうに、光悦本には刊記がないので、それが果して何時出版されたかを知ることが出来ないが、岩崎

文庫所藏の方丈記には慶長十五庚戌七月十三日と墨書してあるので、本書はその時以前に梓行されたことを知ることが出来る。以前とはいふものゝ、その年次より考へて見ると、その年か、然らずとも直前に刊行されたものであるやうに思はれる。同様な装幀によつてある謄本なども、方丈記と距らぬ時に版になつたと見るべきでは無からうか。

それはともかくも廣義に於ける嵯峨版の著しい特色は、文章達徳録と史記とを除いては、殆ど國文學書類である事である。これを當時の他の諸版と比較して見ると、その特異な存在が一層判然するから、少しく諸版の概略を述べて見よう。

徳川家康が命じて出版せしめたものに伏見版と駿河版とがある。伏見版は家康が僧三要元信をして開版せしめたものと呼んでゐる名である。家康は文教興隆の爲に伏見に學校を設け、三要をしてこれを督せしめ、かたはら圖書出版の事に當らしめたのである。その書に孔子家語慶長四年西曆一五九九年刊、三略同四年刊、六韜同四年刊、貞觀政要同五年西曆一六〇〇年刊、三略同五年刊、東鑑同十年西曆一六〇五年刊、周易同十一年西曆一六一〇年刊、七書同十六年西曆一六一五年刊がある。駿府版は林道春が家康の命を奉じ僧崇傳がこれを援けたものである。駿府に於て開版せられたもので、その書は大藏一覽元和元年西曆一六一五年刊と群書治要元和二年西曆一六一六年刊とであつた。この二書は銅活字を用ひたもので、その點に於て我が刊行史上に注意すべきものである。大藏一覽の時は、豫て收藏されてゐた活字が大小合せて八萬九千八百十四字——これは征韓諸將が朝鮮から將來したものでないかといふ説もあるが、また後陽成天皇の勅命によつて、慶長十一年に銅活字十萬個を鑄造調進してゐるから、その時に別に貯へてゐたものであらうといふ説

もある——あつたのに、新に大小一萬三千六十八字を鑄造して補つたのであるが、群書治要の時はそれでも足らなかつたから更に一萬三千個を補つたとある。

銅活字を以て開版せられたものには後水尾天皇の勅版皇宋事實類苑七十八卷十五冊がある。その完成したのは元和七年西曆一六〇七であつた。宋版を翻刻遊ばされたものであるが、支那では疾くに散逸した貴重書である。

これより前銅活字で刊行されたものは、有名な直江版五臣註文選である。この書は上杉家の臣で藏書家であつた直江兼續が京都日蓮宗要法寺に於て開版したもので、慶長十一年西曆一六〇七に出来てゐるから、我が國に於ける銅活字刊行の最初の書である。要法寺ではその他法華經傳記慶長五年西曆一六〇〇刊、元祖蓮公陸埒略傳慶長六年西曆一六〇一刊、沙石集慶長十年西曆一六〇五刊、和漢合運圖刊年未詳論語集解同大學同中庸等が出版せられてゐる。なほ京都・奈良・高野等で出版されてゐるが、それは多くは禪籍佛書醫書字書の種類であつた。

但し慶長元和の際に出版された字書佛書以外の國書も無いではない。御成敗式目慶長十二年西曆一六〇七刊、職原鈔同十三年西曆一六〇八刊、日本書紀慶長十五年西曆一六〇九刊（南葵文庫藏に慶長十四年刊行の日本書紀十五冊があつたと聞いてゐるが見た事はない）、徒然草鳥丸光廣刑部木、慶長十八年西曆一六一三刊、明徳記慶長十九年西曆一六一四刊、源氏物語元和九年西曆一六二二刊、等が有り、刊年未詳の書で慶長元和版と推定されるものに萬葉集・語抄・枕冊子・徒然草・方丈記・狹衣・舞の本・曾我物語・伊曾保物語・平家物語等の活字本が數へられる。

かうして慶長元和間の出版界を通覧すると、嵯峨本には殆どその全部といつてもよい程に國文學書の多いことがはつきりするであらう。中にも古今和歌集のあることは最も注意せられなければならない。和歌は國文學中、學問の

對象となつた最初のものであり、古今集はまたその中心たるものである。鎌倉になつて源氏物語と伊勢物語とが學問の對象と目されるやうになつたのも、その講讀が和歌道に裨益ありと考へられたからであつた。狭衣物語が學問書となつたのは肖柏・實隆の時代からであらうし、徒然草や方丈記は江戸時代になつてからであらう。かういふわけで、古今集は信仰の對象にまであがめられてゐたので、古今集等は一種神聖視せられて、その授受には森嚴な儀式が用ひられたものであつた。古今學とは古今集の和歌の講釋のことである。だから、伊勢物語の註釋であるとか、源氏物語の参考書であるとかいふものまでは嵯峨本中に刊行されてゐるが、さすがに古今集の註釋書も参考書もまだ彫棄されなかつた。けれども、源氏物語や伊勢物語の本文のみならず、その参考書類までも梓行せられ、剩へ本文だけではあるが、古今集が公刊されたといふだけでも、國學の上の重大事件でなければならぬ。いふまでもなく古來物我が學藝の授受は皆祕密傳授の様式に據つたものであつた。それが一部でも公開されたといふことは、學問界の革命である。それは時勢が然らしめたものであらう。清原秀方が博士家の傳統的獨占權を主張して、徳川家康の一喝にあつた時代である事を考へて見たら、うなづけるやうに思ふ。

實際國學の自由が實行されたのは、元祿時代まで下るのであるが、時勢は已に動きつゝあつたものと見てよからう。が、そこにも光悅の獨創的の信念が認められるのではなからうか。

本阿彌光悅は全的にいへば器用な人であつた。本職の刀劍鑑定のこととはさておき、書といひ繪といひ漆器といひ陶器といひ、行くとして可ならざる所は無かつたのだから、それを無器用であつたとは言はれないが、手さきの動きは決して器用な人ではなかつた。その無器用な指の動きを滿身の趣味で仕上げて出來た藝術が光悅の藝術であ

る。而してその趣味が、徹底した日本趣味であり、上代趣味であつた。光悦の唐紙といひ、その文字といひ、皆上代を學んだものであつた。しかし當時は豪華な桃山藝術の生れた時代であつた。さうした時代の寵兒であつた光悦の趣味は、たゞ優艶であつた王朝藝術の面貌に満足することが出来なかつた。即ち上代の唐紙模様もその文字も時代趣味に調和すべく、王朝趣味の根本義を失はない程度において、新意が加へられたのである。尤も上代の藝術に渴仰することも時勢であつたとおもふ。古筆が愛好せられて、その専門家である古筆家の元祖了佐がゐた時代である。傳へられる所によれば古筆を切つて手鑑に作るのは、豊臣秀次に始まつたといふことである。

結局光悦は時代の兒であつたのである。かくて光悦の上代趣味はその刊行書の種類とその装釘に及んでゐるのである。

葉本の装釘は奈良朝や王朝時代は卷子と粘葉（胡蝶装）とであつた。これは刊本であると寫本であるとかゝはらず、支那唐代からの書籍の装釘であつて、我が國に於てもそれをそのまま傳へてゐたのである。それが鎌倉以後の版本になると、宋元版の影響を受けて折本や袋綴の装釘が現はれて、遂にこの新装釘法は古装釘法を壓倒するに至つたことは前にも一寸述べておいた通りである。然しまだ版本に大和綴を用ひた例を見なかつた。

大和綴を近來粘葉と間違へたり、胡蝶装と混同したりする人がある。が、粘葉は文字の示す通り粘で一枚一枚はりつけたものであり、それが胡蝶装であり、大和綴は數葉づゝ絲で一括したものを更に絲を以て綴ちて一冊に纏めたもので、大福帳や洋本の綴ぢ方に似たものである。これはその名から考へても日本で創めたものであらうし、その數枚づゝ一括することは衣の襲ねから思ひついたものではなからうかと想像してゐる。

その大和綴を光悦は用ひてゐる。これは版本には稀有な装釘であつて、管見の及ぶ限に於ては、通稱元和卯月本といつてゐる謄本に用ひられてゐる外には無いのではないかとおもふ。光悦が版本には先例のない此の装釘を用ひたのも、唐紙を學んだのと同じく、和歌の本が多く大和綴であるところから、その古ながらの姿を慕つたものであらう。

活字版は一名一字版ともいつた位に一板に一字づゝ彫刻したもので、自由に置きかへられるのがその特徴であるが、平假名交り文に限つて、四字位まで連続して彫られてゐるのが交つてゐる。これは同じ文字連続で現はれてくる所が繰返されるから、始まつた便法であることは勿論であるが、漢文でも同じ連続文字の繰返される事が無いではなく、特に片假名交り文に至つては平假名交り文と相違のあらう筈はないのに、平假名交り文の活字に限つてその事のあるのは、何か他に理由が無ければならぬことと思ふ。それについて先づ思ひ當るのは、平假名の本質に伴ふ續け書きの事である。この續け書きの事を書家は遊絲連續綿體といつて、王朝時代の盛時以後になつてから發達したものとやうに考へてゐるが、それは甚しい誤解である。この點を委しく考證する頁を持たないから略するが、ともかく平假名は萬葉假名を連續的に走筆する間に、いつとなく發達したものであつた。さうしたわけで、この假名は續け書きするところに、本質も現はれ妙味も存在するのである。これを一字一字切放しては、その發達事情に相違してをり、従つて文字の味も色も出ないのである。それ故幼筆で自由のきかぬ間は、一字づゝ——これを王朝時代には「はなちがき」といつてゐる——の練習をしたものであるが、少しく筆が動くやうになつてくると、必ず和

歌であるとか消息であるとかによつて、平假名の練習は致したものである。古今集や宇津保物語には、平假名の手本は和歌を以てしたことが見えてをり、源氏物語には直接名手の消息を以てしたことが見えてをる。即ち平假名の手本はかならず続け書きのものを用以てゐるのを見て、連綿體の起原を察することも出来ようし、平假名の特質を伺ふことも出来るであらう。さういふやうに平假名と続け書きとはその初から宿命的に相離るべからざるものであつた。以上述べて来たところは無論筆寫の場合の事であるが、宿命は遂に摺寫の文字にも纏綿たるものがあつたのであらう。それが連續活字を創作せしめた根原ではないかとおもふと、今更ながら傳統の力づよさに驚かされるのである。光悅の版にも固よりこの連續活字が多く用以てゐる。

慶長元和は活字版の全盛期であつた。續く寛永時代にも活字出版は前期の情勢を受けて賑かであつた。伊勢物語・源氏物語・枕冊子・狹衣物語・住吉物語・曾我物語・義經記・舞の本・昨日は今日の物語等今記憶に上つてゐる國文學書も數多く且つ頻繁に刊行せられてゐる。漢文書では此の時代になつて訓點を加へて印刷することが行はれるにつれて、活字版は漸く下火になつて来たやうである。前にも述べたやうに慶元間にルビの發生をも見たのであるが、組版上の困難もあつたのであらう、十分發達するまでに至らなかつた。要するに活字印刷は數に於てはともかくも、慶元時代の活氣を持つてはゐなかつたやうで、年と共に次第に整版に壓されて来て、遂には好事家の手に弄ばれるに過ぎないほどに衰へてしまつたのである。當時の活字印刷は特殊の場合の外は木製であつて、耐久力も整版に優つてゐるわけではなし、印刷上保存上にもいろ／＼の不便が伴つて、整版と競争することが出来なかつたであらう、珍

らしさの興味が無くなるにつれて衰退してしまつたのである。が、この衰退理由の中に

一、漢文に於ては訓點用ルビ使用上の不便

二、國文に於ては傳統的魅力に伴ふ平假名續け書き組入れの不便

を數へることは出来ないものであらうか。

戰亂の爲とはいへ、出版界が沈滞したのをこゝまで隆昌ならしめたのは、一に活字版の持つてゐた新奇の魅力の故であつた。活字版の刺戟によつて復活した出版界は、日一日と振興して寛永以後は急に調査を遂げることが困難なほどに著しい展開を示してゐる。特に注意すべきは町版の勃興である。寺社特志家などの出版に限られたものが、營利的に圖書を出版する商人を生じたのである。木宮黍彦氏はその著日本古印刷文化史の中で、南北朝時代には營利を目的とする雕刊者のあつたことを、和漢の資料を集めて精密に立證してゐられる。私もその説を信するのであるが、元和寛永以後になると世襲的に雕刊販賣によつて衣食する商人も生じて、人文の進歩に伴ふ一般の讀書慾とそれに乗じて利をねらふ商賣と相俟つて出版界をいよゝゝ促進せしめたのである。而して娛樂書の出版の始まつたのもこの江戸時代であつた。従來は信仰の爲か實用の爲か、ともかく生活の必需品として雕槧されたのであつたが、印刷出版が營利事業になるにつれて、單に必要な埒内に踞踏してのみは居らず、自由な利用方面に伸びて來たので、畢竟その發達を證すべき事實である。その娛樂品出版の一として版畫が數へられる。版畫も江戸の中期までは輪廓だけ版におこして、彩色は後に筆で施したものであつた。この法は已に王朝末期の扇面經の下繪に用ひられてをり、

鎌倉室町の佛像版畫などを経て江戸に至つてゐるのであるが、江戸時代中期後になると、その彩色までも、世界に先立つて版で刷るやうになつたのである。また正面版拓本類はこの時代になつて發達した。

前述の通り我が印刷文化は、先づ支那の印刷術によつて啓發せられ、次いで朝鮮の印刷術に刺戟せられて發展して來たものであるが、なほ忘れてならないのは西洋印刷術の渡來である。西洋印刷術が我が國に渡來したのは可なり古い事である。天文十八年西曆一五四九に宗旨問答書が又天文廿三年西曆一五五四に排佛の書が何れも日本文で我が國で出版されたといふ事であるが傳はつてゐない。またその實否に就いても多少の疑ひがあるといふ事であるが、天正十八年西曆一五九〇にアレツサンドロ・ヴリニャーニによつて活字印刷機が輸入されて後は、肥前の天草・加津佐・長崎・京都などで出版された。慶長に刊行され或は慶長の版と考へられる傳存本は廿三種ある。今これを新村出氏の諸著、村岡典嗣氏の吉利支丹文學抄、橋本進吉氏の文藏元年大草版、吉利支丹教義の研究によつて、刊行順に列擧して見よう。

チントスの御作業 一冊 天正十九年西曆一五九一刊 (文語)

ドチリイナキリシタン 一冊 文藏元年西曆一五九二刊 (文語)

信心録 一冊 文藏元年西曆一五九二刊 (文語)

口譯平家物語ヘビダ 一冊 文藏元年西曆一五九二刊 (口語)

伊曾保物語 一冊 文藏二年西曆一五九三刊 (口語)

金句集 一冊 文藏二年西曆一五九三刊 (文語)

- ラブル、拉丁文典 一冊
文祿三年西曆
一五九四刊 (拉丁、葡
 語、口語)
- 拉葡日對譯辭書 一冊
文祿四年西曆
一五九五刊 (同前)
- コンテンツスムンヂ 一冊
慶長元年西曆
一五九六刊 (文語)
- 落葉集 一冊
慶長三年西曆
一五九八刊 (文語)
- サルバトウルムンヂ 一冊
同前 (同前)
- ぎやどべかどる 二冊
慶長四年西曆
一五九九刊 (同前)
- ドチリイナキリシタン 一冊
慶長五年西曆
一六〇〇刊 (同前)
- どちりいなきりしたん 一冊
同前 (同前)
- 日葡辭書 一冊
慶長八年西曆
一六〇三刊 (口語、
 葡語)
- 日本經典ロドリゲ
 一編
慶長九一十二年西
 曆一六〇一四八刊 (口語、文
 語、葡語)
- サカラメント提要セルゲ
 一編
慶長十年西曆
 一六〇五刊 (拉丁)
- スピリツアル修行鈔 二冊
慶長十二年西
 曆一六〇七刊 (文語)
- フロスクリ(聖教)
 一編
慶長十五年西
 曆一六一〇刊 (拉丁)
- こんてむつすむんぢ 一冊
同前 (文語)
- ひですの經(聖教)
 一冊
慶長十六年西
 曆一六一二刊 (文語歌)
- どちりいなきりしたん 一冊
(刊年)
 未詳 (文語)

日本文學刊行史(慶長元和時代まで)

その他覆本によつてその面影を偲ばれるものや元和寛永の版、著作時所未詳のものを加へると十本近く加へることが出来るやうである。勿論何れも活字版である。

右の中慶長三年の落葉集やサルバトウルムンヂ・同五年のドチリナキリシタン・慶長十五年のこんてむつすむんぢ・慶長十六年のひですの經等は漢字と平假名を用ひて印刷されてある。而してその活字にルビを附したものとあつても、慶長十四年の平假名交り文の太平記の活字版と似かよつてはゐるが、どうもこの西洋古活字版は我が中央印刷界とは交渉を持つたことは無かつたやうである。前記の通りこの中には我が古文學まで版行されてゐる。その目的が何であつたにしろ、文學書は文學書であるのだから、これらの出版は立派に日本文學刊行史の幾頁を飾るべき資格を持つてゐる筈ではあるが、結局孤立の存在に過ぎなかつたやうである。同時の存在であつたけれども、史的展開の役前を分擔する一員では無かつたやうである。けれども私はこの方面には餘り多くを語るべき資格は無さるのである。

もはや與へられた頁數は超えてゐる。不完全ながら、こゝで筆を止めて、また機會があつたならば 寛永以後の刊行史と共に補足したいと考へてゐる。



昭和八年十月二日印刷
昭和八年十月七日發行

日本文學講座 第一卷

編纂者 山本三生

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 村尾一雄

東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地

發行所 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替口座 東京八四〇二番

電話芝(43) 自一一二一番
至一一二四番

(兩角紙本)